The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンゴル版『ソバシド』に関する研究
Author(s)	宮前, 公美
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34545
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　宮　前　公　美　）	
論文題名	モンゴル版『ソバシド』に関する研究

本稿の資料である『ソバシド』（*Subašidi*）という作品は、13世紀始め、サキャ・パンディタ・クンガ・ゲルツェン（Sa skya Pandita Kun dga' rgyal mtshan）（1182－1251）によってチベット語で書かれた教訓詩である。原題はサンスクリット語で*Subhāsita ratna nidhi nāma śāstra*（『善説宝蔵論』）、チベット語で*Legs par bshad pa rin po che'i gter*（『貴い格言の蔵』）、モンゴル語で*Sayin ügetü erdeni-yin sang*（『善説宝蔵』）と言う。モンゴルでの通称は『ソバシド』（*Субашид, Subašidi*）である。

原文は、4行で1つの詩を構成する4行詩であり、その1行は7音節でできている。詩は全部で457連あり、9つの章に分けられている。『ソバシド』のモンゴル語訳は7つあるが、本稿では、そのうちの2つ、13世紀末のタルニチ･トイン･ソノム・ガラ（Tarniči toyin Sonom Gara）の翻訳と18世紀のツァハル･ゲブシ･ロブサンチュルテム（Čaqar gebsi Lubsangčültim）の翻訳を扱う。

第1章では、上記の2種類の翻訳に現れている以下の2つの言語的特徴について述べる。まずは、モンゴル語の条件及び譲歩の表現形式についてであるが、13世紀においても18世紀においても、条件の表現に比べ、譲歩の表現の方がバリエーションに富んでいることがわかる。条件の表現形式は、条件の連用語尾-basu^{2}を基本としながら、それに強意助辞eleやberを伴う場合に限られるが、譲歩の表現形式は、条件の連用語尾-basu^{2}と、そこに強意助辞berやtaqiを伴うものの他、結合の連用語尾-ju^2、限界の連用語尾-tal-a^2、分離の連用語尾-γad^2、そして、譲歩の連用語尾-baču^{2}と、出現数に違いはあるものの、多様な連用語尾を用いて表現している。ソノム・ガラにしてもロブサンチュルテムにしても、譲歩表現なら-basu^2 ber形だけを用いるといった機械的な翻訳は行わなかったことがわかる。

非常に特徴的なのは、ロブサンチュルテムの翻訳における譲歩表現のほとんどを担う譲歩の連用語尾-baču^{2}の存在である。しかし、譲歩の連用語尾-baču^{2}はソノム・ガラの翻訳には存在しない。ソノム・ガラの時代には条件の連用語尾である-basu^{2}や、その-basu^{2}に強意助辞berもしくはtaqiを伴う形式をもって譲歩の意味を表現していた。このことから、条件の連用語尾-basu^{2}はもともと譲歩の意味を包含していたと考えられる。そして、特に譲歩の意を明確にするときは、強意助辞ber、taqiを付加していた。ところが、譲歩の連用語尾-baču^{2}が登場し、条件の連用語尾-basu^{2}に包含されていた譲歩の意味が分化したのである。連用語尾-baču^{2}によって、譲歩の意味を明確に表すことが可能になった。

次に、ソノム・ガラとロブサンチュルテムの翻訳に出現する定型表現-γdaqui^{2}とülü -γdaqui^{2}について述べる。受身態-γda^2-と未来の動詞連体語尾-qui^{2}から成る定型表現である。2人称もしくは3人称に対して使われ、-γdaqui^{2}は婉曲的助言《～されんことを》、ülü -γdaqui^{2}は懸念諫言《～されぬように》の意味をもつ。

13世紀のソノム・ガラの訳には-γdaqui^{2}の異形態-daqui^2（～-taqui^2）と-γdaqu^2（～-daqu^2～-taqu^2）などが見られたが、18世紀のロブサンチュルテムの訳では-γdaqui^{2}のみとなり、異形態はなくなっている。ソノム・ガラの訳とロブサンチュルテムの訳を比較すると、後者では定型表現-γdaqui^{2}は減少し、ülü -γdaqui^{2}はほぼ見られなくなっている。このことから、定型表現-γdaqui^{2}はロブサンチュルテムの翻訳では、残存的にのみ使われていたものと思われる。その表現が現在使われなくなった理由として、受身表現との形式の重複を避けることと、他の表現で表すことが可能であったことの2つが考えられる。

第2章では、『ソバシド』という作品が、モンゴル語のことわざとして成立していく過程について述べる。『ソバシド』と表現形式の類似した現代のモンゴルのことわざは10,475個のうち、227個存在している。これは、約50個に1つの割合である。また、『ソバシド』の連からからすると457連のうち106連に類似したことわざが認められる。類似の度合いは異なり、以下の4つに分類できる。

Ａ．内容が同じで、かつ表現形式も単語もほぼ一致するもの（21個）
Ｂ．内容が同じで、表現形式も同じだが、単語が異なるもの（72個）
Ｃ．内容が同じで、表現形式は異なるが、単語が同じもの（25個）
Ｄ．内容が同じだが、表現形式、単語ともに異なるもの（109個）

また、『ソバシド』の4行の構成には型があり、最も多い型は、4行を2行2行にわけ、前半の2行で「理」を述べ、後半の2行で「比喩」を述べる型である。この「理」の部分と類似したことわざと、「比喩」の部分と類似したことわざの両方が存在し、数の上でも著しい偏りはないため、「理」か「比喩」のどちらかの方がことわざになりやすいということはないと考えられる。ただし、「理」と「比喩」の両方の部分から成立したことわざは少なく、「理」か「比喩」か、どちらか一方から変化してモンゴルのことわざになったものが圧倒的に多いという特徴がある。

『ソバシド』からモンゴル語のことわざが成立するまでに、単語の置き換えや、挿入、削除などの変化や、名詞語尾、動詞語尾など表現形式の変化が様々に起きている。その変化には以下のような特徴が認められる。

１）現代語の口語でよく使う表現に変化する
名詞や動詞が現代語でよく使用される単語に置き換わり、否定助辞ülüは-rγй に変化する。また、複数接尾辞によって名詞の単数複数が変わる。

２）意味の対比を明確にする
2行で構成されることが多いモンゴル語のことわざの1行目と2行目の対比を明確にするために起きる変化である。反対の意味をもつ単語を挿入するか、または、単語を置き換えて、対比を際立たせている。内容もより簡潔なものに変わる。

３）リズミカルな響きにする
モンゴル語のことわざは各行の単語数が2から5の場合が多いが、単語の置き換えや不要部分の削除、内容の簡潔化を行い、単語数をその数の範囲内に収まるように調節している。また、ことわざの1行目と2行目の単語数を一致させるという特徴ももっている。さらに、単語の挿入や置換を行うことで、頭韻、脚韻を踏ませ、リズミカルな響きを生み出している。

『ソバシド』のモンゴル語訳から、モンゴル語のことわざへ変化するときに起きる諸現象は、現代の口語で使用する表現にすること、1行目と2行目の意味の対比を明確にすること、そして、リズミカルな響きにすること、この3つの点を実現する方向に起きている。『ソバシド』からことわざが成立する場合、モンゴル語訳のままではなく、モンゴル語のことわざの形式に当てはまるように変化していることがわかる。

次に、ことわざの2行のうちの１行が『ソバシド』と表現形式が類似し、その1行に対して、残りの1行が創作されていることわざが存在する。『ソバシド』と表現形式の類似した現代のモンゴルのことわざ227個中141個存在しており、半数以上のことわざでこの現象がみられることになる。創作されることわざの形式面の特徴は、『ソバシド』から成立した1行と形式を一致させていることである。単語の数はもちろんのこと、名詞の格語尾や動詞語尾、接尾辞なども一致している。ただし、少数ではあるが、1行目と2行目で一部表現形式が異なる場合、1行目と2行目が肯定文と否定文からなる場合、1行目と2行目の両方が合わさって初めて1つの意味を表す場合は形式が一致しない。

また、意味の面における創作のパターンは4つある。『ソバシド』と表現形式が類似している1行は、「理」の部分に類似しているものと、「比喩」の部分に類似しているものとがあることは上述の通りである。『ソバシド』の「比喩」の部分がことわざの1行になり、「理」が創作される①「比喩＋理」型、『ソバシド』の「理」の部分がことわざの1行になり、「比喩」が創作される②「理＋比喩」型、『ソバシド』の「比喩」の部分がことわざの1行になり、「比喩」が創作される③「比喩＋比喩」型、『ソバシド』の「理」の部分がことわざの1行になり、「理」が創作される④「理＋理」型である。
また、③「比喩＋比喩」型と④「理＋理」型には、１行目と2行目の意味が類義の場合と反義の場合の2つがある。ただし、1行目と2行目の両方が合わさって初めて1つの意味を表す場合は、その限りではない。

以上のように、『ソバシド』から成立したことわざの1行に対して、もう1行が創作される場合、形式的にも、意味的にもある一定の規則性を持って創作がなされていることがわかる。

『ソバシド』という作品は、13世紀と18世紀という異なる時代のモンゴル語の翻訳が存在するため、その翻訳を比較すればモンゴル語に起きた言語の諸現象の一端を知ることができる。そして、『ソバシド』の一部は、モンゴル語のことわざへと姿を変え、現代においてもモンゴルの人々の身近に存在しているのである。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　宮前　公美　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	塩谷　茂樹
	副 査　教授	岸田　文隆
	副 査　准教授	清水　政明
	副 査　教授	杉村　博文
	副 査　名誉教授	角道　正佳

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、１３世紀初めに、サキャ・パンディタ・クンガ・ゲルツェンによってチベット語（Ａ言語）で書かれた教訓詩である、通称『ソバシド』という作品に関し、１３世紀末のソノム・ガラのモンゴル語訳（Ｂ言語）と１８世紀のロブサンチュルテムのモンゴル語訳（Ｃ言語）という代表的な二種の翻訳を通じて、１つは、言語的特徴の観点から、ａ．条件《～すれば》と譲歩《～しても》の表現形式と、ｂ．婉曲助言《～されんことを》と懸念諫言《～されぬように》の定型表現という、異なる２種類の通時的変化を取り上げ、それぞれ現代モンゴル語（Ｄ言語）への変化の過程を明らかにする、もう１つは、ことわざ成立の観点から、『ソバシド』の作品が、１３世紀と１８世紀の二種のモンゴル語訳を経て、現代モンゴル語のことわざとしていかに成立したのか、その特徴を形式と意味の両面から明らかにするという、大きく２つの章から成り立っている。

考察の結果、論文執筆者は、前者の問題に関し、

ａ．条件《～すれば》と譲歩《～しても》の表現形式は、Ｂ言語では、基本的には、単一形式 Ｖ-basu （Ｖは動詞語幹、-basuは条件の連用語尾）としては、条件と譲歩の両者の形式的区別はなく、概ねコンテクストに依存するが、若干の強意助辞（ele、ber、taqi）を付加した複合形式としては、例えば、Ｖ-basu ele は条件の意を、Ｖ-basu ber やＶ-basu taqi はその大半が譲歩の意を表示することが明らかとなった。一方、Ｃ言語では、譲歩の意で、一部 Ｖ-basu やＶ-basu ber 等の痕跡が若干見られはするものの、Ｖ-baču（譲歩の連用語尾）という新たな動詞語尾の成立出現によって、概ねＶ-basu が条件の意を、Ｖ-baču が譲歩の意を担うようになり、形式的に条件と譲歩の意味の分化がなされたことが明らかとなった。以前から、１３世紀に書かれた『元朝秘史』と１７世紀の『アルタン・トブチ』という、異なる二つの文献における、異なる二つの時代の、譲歩表現の通時的考察はあるものの、今回のように、『ソバシド』という同一文献における、異なる二つの時代のモンゴル語訳を利用し、しかも条件と譲歩の二つの表現形式を同時に取り扱うことで、個々の通時的変化、並びに両者の相互関係をより鮮明に浮き彫りにすることが可能となり、極めて説得力のある結論に至っている。

また、ｂ．婉曲助言《～されんことを》と懸念諫言《～されぬように》の定型表現は、それぞれ -ɣdaqui と ülü -ɣdaqui という形式で、Ｂ言語では、それぞれ７３例、３１例、またＣ言語では、３６例、２例と、時代が下るにつれ使用頻度が減少して出現するが、現代モンゴル語では全く用いられなくなっている。この消失理由として、表現形式が、元来受身の意を表示する -ɣda- 形と一致することから、意味の混同を避けた可能性と、時代が下るにつれ、口語形式による代替表現が比較的豊富になっていった可能性の二つに起因するものと結論づけている。この表現に関しては、中世モンゴル語における特殊な意味を持つとの指摘は、以前から一部あったものの、『ソバシド』という膨大な資料を詳細に調査したうえで、定型表現であると位置づけ、形式と意味の両面から、通時的に取り組んだ研究は、これが初めてであり、とりわけ、Ｂ言語におけるこの表現形式の存在は、いわゆる前古典期モンゴル語（pre-classical Mongolian）の言語的特徴の一つとして、今後特筆されるべきであろう。

さらに、論文執筆者は、後者の問題に関し、

『ソバシド』原典に現れる４行詩から成る、合計４５７連の教訓詩すべてに対し、チベット語原典（Ａ言語）→１３世紀末のモンゴル語訳（Ｂ言語）→１８世紀のモンゴル語訳（Ｃ言語）→現代モンゴル語（Ｄ言語）のことわざという、『ソバシド』起源のことわざの成立過程を示すべく、合計２１３９ページにも及ぶ膨大な資料編を、博士論文の本文とは別に完成させ提出しており、今後『ソバシド』研究を多方面から進めていくうえで、極めて重要な資料を提

供している。

考察の結果、『ソバシド』の４５７連のうち、現代モンゴル語のことわざに何らかの形で表現形式が類似したものが１０６連、ほぼ４分の１の割合で見られ、しかも現代語のバリエーションを含めると、数にして２２７個にも上ることが明らかとなった。

また、４行詩の構成を、意味内容の点から分析すると、最初の２行で「理（ことわり）」を、後の２行で「比喩」を述べるパターンが最も多く、しかもそのどちらか一方から、現代モンゴル語のことわざに、２行詩として変化発展したものが圧倒的に多いという特徴があることも明らかにした。

とりわけ１８世紀のモンゴル語訳（Ｃ言語）の４行詩と現代モンゴル語（Ｄ言語）のことわざの２行詩を、詳細に比較検討した結果、その成立過程において、1）現代語の口語表現に変化させる、2）１行目と２行目の意味の対比を明確にする、3）単語の挿入、置換、押韻（特に頭韻）等によってリズミカルな響きをもたせるという、三つの原則に依拠していることを帰納的に導き出した。

さらに、現代モンゴル語（Ｄ言語）のことわざの２行詩のうちの１行が、『ソバシド』起源の表現形式で、残りの１行が、１８世紀のモンゴル語訳（Ｃ言語）以降、完全に創作された表現形式、つまり、＜『ソバシド』起源＋創作の２行詩から成るもの＞が存在し、その数は、両者に類似することわざの半数以上（２２７個のうちの１４１個）にも及ぶことが、明らかとなった。

また、意味内容の点から、『ソバシド』起源が「比喩」ならば、現代モンゴル語（Ｄ言語）のことわざも「比喩」で、創作部分が「理」または「比喩」の２つのパターンが、一方、『ソバシド』起源が「理」ならば、ことわざも「理」で、創作部分が「比喩」または「理」の２つのパターンが、つまり合計４つのパターンがあることにも言及している。

つまり、１８世紀のモンゴル語訳（Ｃ言語）から現代モンゴル語（Ｄ言語）のことわざへと成立する過程で、１行が『ソバシド』起源で、もう１行が新たに創作される場合、形式的には、上述した三つの原則に依拠しながら、しかも意味的にも、ある一定の規則の下で創作がなされたことが、今回の一連の研究により、明らかとなった結論の一つである。以前から『ソバシド』に関する文献学的研究、形態的・語彙論的研究は、数点見られはするものの、創作部分に対する意味内容の点からの通時的考察は、本研究が初めてである。

『ソバシド』という１３世紀にチベット語で書かれた４行詩、４５７連からなる教訓詩は、１３世紀末の、いわゆる前古典期モンゴル語（pre-classical Mongolian）に属するモンゴル語訳と、１８世紀の、いわゆる古典期モンゴル語（classical Mongolian）のモンゴル語訳という、異なる二つの時代の翻訳本の比較を通じて、モンゴル語史に起こった様々な言語的諸現象を、通時的側面から観察することができるのは言うまでもないが、本博士論文では、そのうち、条件《～すれば》と譲歩《～しても》の表現形式と、婉曲助言《～されんことを》と懸念諫言《～されぬように》の定型表現という、異なる２種類の通時的変化を取り上げ、それぞれ現代モンゴル語（Ｄ言語）への変化の過程を明らかにした。

また、『ソバシド』の一部の意味内容は、このおよそ２世紀の間に、モンゴル語のことわざとして姿を変え、７～８世紀を経た現在もなお、脈々と受け継がれているが、それは単に原典『ソバシド』からの直接のモンゴル語訳という形ではなく、あくまでもモンゴル語固有の枠組みの中で、形式的には三つの原則の下、意味的にも新たな創作という革新的部分を付加して、独自に発展を遂げたことが、一連の研究によって明らかとなったことは、まさに特筆すべき点である。

本博士論文は、合計二千ページを優に超す膨大な資料編から、帰納的に導き出された事実のみに依拠し、それらをより客観的に分析するという堅実な実証的手法に徹している。そのため、そこから得られた結論は、どれも論旨に無理はなく、説得力があり、今後の『ソバシド』研究に、新たな道を大きく切り開いたことは、疑う余地はないものとして、高く評価できる。

以上、論文審査の結果を踏まえ、当該博士論文が、本学において博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい水準に達したものと判断し、五名の審査委員が全員一致で合格と結論づけた。